

「娘はなぜ命を奪われたのか」。20歳だった長女が殺害されてから10年余り。容疑者は自殺し、真実が分からぬまま自問を続けてたどり着いた結論がある。「加害者が生きる意味や人の痛みを感じられていたら、事件は起きなかつたかもしれない」。一筋の思いを胸に、加害者と向き合う。

ライフストーリー

Life Story

vol.25

幸せな日々は、突然断ち切られた。
 ▲歩が学校で倒れた。迎えに行ってくる。同じ山口県防府市役所に勤める夫からのメモが、職場の机の上に置かれていた。

2006年8月。山口県内の高等専門学校5年生だった歩さん(当時20歳)が学校の研究室で、首を絞められるなどして殺された。熊本大学の編入試験に合格し、建築士への夢に向かって歩んでいた時だった。警察署に駆けつけると、冷たくなった歩さんがい

命の意味 加害者の心へ

「人の痛み感じて」語り続け

た。朝、元気に手を振って学校に送り出した娘。「歩ちゃん、起きて」と何度も呼びかけた。

深夜、車で自宅へ帰った。土砂降りの雨だった。犯人への怒り。憎しみ。自分の胸に真っ黒い雲が渦巻いた。

事件から10日後。追い打ちをかけるような知らせが届いた。山口県警が殺人容疑で指名手配した当時19歳の少年の遺体が発見されたのだ。自殺とみられ、遺書もなかった。

少年は高専の同級生。事にも、絶望の中、考え続けた。件前、歩さんからパソコンソフトの使い方を教えてもらう約束をしていた。「それなのに、どうして」。動機も分からず、全身の力が抜けた。「歩がいないのになぜ自分が生きているのか」。同様に苦しむ夫とともに、絶望の中、考え続けた。

受刑者の更生に取り組む被害者遺族

中谷 加代子さん 56

事件の約1年半後。少年の両親が自宅へ来た。謝罪を繰り返す2人は、憔悴

しきっていた。「加害者の家族も重いものを背負ったのかもしれない」と思った。少年は、なぜ事件を起こしたのか。時を戻すことができるなら、どうすれば事件を起こさずに済んだのだろう。自問するうちに、「彼がもし、生きる意味を真剣に考え、周囲の人のことも大切に思ってくれていたら」と考えるようになった。

12年6月。山口県美祿市の刑務所「美祿社会復帰促進センター」から講話を依頼された。殺人や傷害致死の約10人が相手だった。待望の女の子で、自分の人生を一步一步、歩んでほしいという願いを込めて名付けたこと。幼い頃は引込み思案だったこと。成長するにつれて明るく元気に

なり、多くの友人に恵まれたこと。修学旅行先から「長生きしてね」と手紙を送ってくれたこと。そして、夫と一緒に、二度と目を覚ますことのない娘の軟らかい頬を何度も触ったこと……。

苦しさや理不尽さという言葉では言い尽くせない、心を踏みつぶされるような感覚。宝物のような娘の命を突然奪われたことの意味を伝えたい。

講話後、「本当の償いを考えたい」「過去から逃げず、向き合っていきたい」と話す受刑者がいると聞き、自分自身が生きている意味を実感できた。

活動を通して、いじめを受けた長女を自殺で失った横浜市の小森美登里さん(60)、東京都世田谷区の一

家4人殺害事件で妹家族を失った入江杏さん(59)と出会った。加害者に怒りや憎しみだけをぶつけても、犯罪は減らせないとの思いが一致。15年末、受刑者の更生に取り組む会「人権の翼」を3人で発足させた。

刑務所で更生指導を担当する臨床心理士の女性は、「受刑者の中には『人の命を奪った自分は、花を見てきれいと感じてはいけな



歩さんの遺影。愛用していたペンダントが掛けられている

プロフィール

夫と長男の3人暮らし。2012年に防府市役所を退職後、公益社団法人「山口被害者支援センター」の直接支援員や人権擁護委員を務める。趣味は手芸と読書。「人権の翼」の活動はホームページ(<http://wohr.jp/>)で紹介している。

「お母さん、頑張ったね」(柳原正和)

何が正解なのかは分からないが、これだけは確信している。「歩だったら、きっと憎しみの連鎖を断つ選択をするだろう」

人生を終えたら、また歩に会いたい。その時、こう言われるような生き方をしたいと思う。